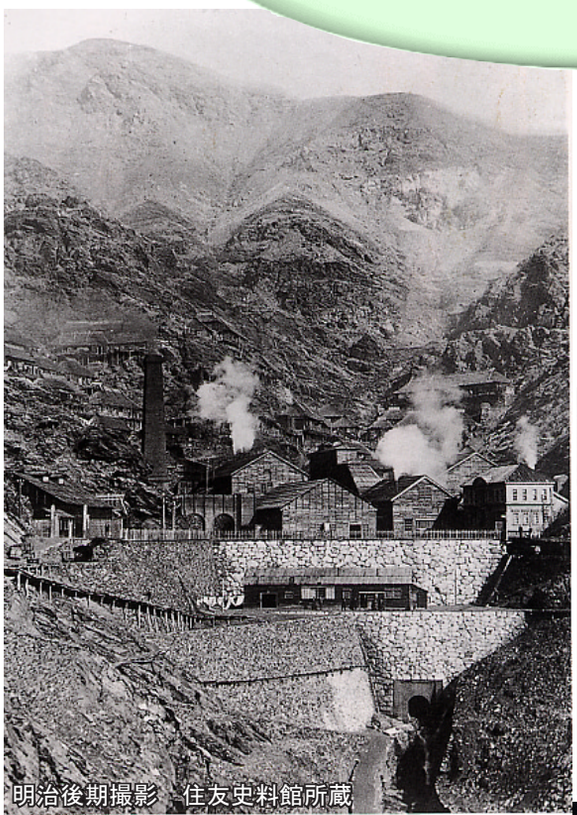
10 まいん

東延（とうえん）

別子銅山近代化の象徴 東延（とうえん）時代


明治後期撮影　住友史料館所蔵

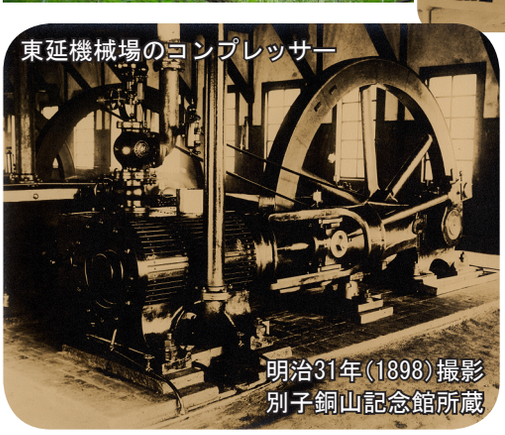
東延（とうえん）は、別子銅山史の中で最も近代化の象徴とされる場所で ,明治 19年 (1886)に小足谷（こあしたに）から、別子銅山の中心施設となる採鉱本部が移ってきました。

現在の様子

東延機械場跡

東延斜坑巻揚機（まきあげ）
明治31年（1898）撮影
別子銅山記念館所蔵

東延斜坑口跡


東延機械場のコンプレッサー
明治31年（1898）撮影
別子銅山記念館所蔵

東延斜坑（とうえんしゃこう）は、広瀬宰平（ひろせさいへい）がフランスから鉱山技師ルイ・ラロックを雇い入れ、明治7年から約2年間で別子近代化計画である「別子鉱山目論見書（もくろみしょ）」を作成させ、その提言によって建設されました。その際の通訳として採用されたのが、塩野門之助（しおのもんのすけ）でした。ラロックの給料は、広瀬の百円に対して六百円も支払われていました。また、もう一つの目的は、江戸安政（あんせい）期の大地震で水没した三角（みすま）と呼ばれる富鉱帯（ふこうたい）の採掘でした。

明治9年に着工、最初手掘りで掘られた坑道も途中ダイナマイトを使用し、明治28年に19年4ヶ月の歳月をかけ、49度の傾斜、長さ526メートルの斜坑を完成させました。

機械場は、東延谷を埋め立て約2,000坪の土地を造成、建設しました。

当初は馬力により鉱石台車を引き上げていましたが、その後、蒸気機関の巻揚機（まきあげき）を採用しました。そして、別子銅山の採鉱量は飛躍的に増大することとなり、近代化を象徴する一時代を築くこととなりました。しかし、採掘場所が深くなっていったことにより、採鉱本部は大正5年(1915)に東平（とうなる）に移り、機械場も昭和7年(1932)に廃止されました。

http://nmh.hearts.ne.jp/k/gaidobook/010/index.htm